

太宰治・文学位相の転換(前)

——『火の鳥』まで——

矢 島 道 弘

1

太宰治の全作品を見わたした時、三つに区分されるのが一般的のようである。¹⁾初期(第一期)は昭和7年頃から12年頃まで——処女作品集『晩年』を中心として『虚構の彷徨』から——二十世紀旗手」などを書いたヘユニークな才能(亀井勝一郎)ないしは「排除と反抗」(奥野健男)といわれる時代であり、中期(第二期)は、13年頃から終戦の20年まで——「満願」から始まり「富嶽百景」、「お伽草子」、「右大臣実朝」など、物語作家の才能が発揮されたときで、「開花と安定」(奥野)、「最も落ちついた健康の時期」(亀井)といわれた時代である。後期(第三期)は戦後の二十年八月から死に至る二十三年六月まで——「斜陽」、「人間失格」などの名作を残して流行作家としてもはやされ、「敗戦と新現実」(奥野)の時代と概括されている。この三つの時期はそれぞれ「左翼崩壊の時代」、「戦争の時代」、「戦後惑乱の時代」と分けた平野謙(太宰治論)の区画にも相応している。この過程で

気づくことは、第一作品集『晩年』以来、大庭葉蔵で象徴される私小説風の自己告白的作品であったものが、中期に至って、明朗な物語ふうの作品、ないしは古典を題材した安定感のあるものに転風していることである。それが戦後の流行作家の時代に至ると、再び初期の私小説風な下降的作品——大庭葉蔵の復活をみせはじめるのである。即ち、前期の「道化の華」、「狂言の神」などにみられる自殺未遂事件を中心とする実生活の告白者太宰ないし大庭葉蔵が後期の「人間失格」に再び登場してきていることである。ところが中期においては全くその姿は見せず、自己を語ろうとしても穏やかな明るい作品となっている。この時期を総称すれば、前期の下降的生活を払拭した人間の明朗な姿があり、鎌倉での入水、縊死未遂事件など一連の退嬰的・自己閉却的行為の因子を放擲して、現実的、社会的人間として常識的に生きようとする意識が強くみられることである。奥野は「人間の美しさだけをひたすら追いつめている」(太宰治論『大岡山文学』30・8)といひ、豊島與志雄は「心慰める路傍の花」(八雲版『太宰治全集』

解説)、亀井は「最も落着いた健康な時期」(創元社版『太宰治作品集』解説)とそれぞれ特徴づけているが、そこにある〈美しい〉〈路傍の花〉〈健康〉という解説のなかに太宰のこの期の位相が象徴されていると思う。ただ、この期にみられる転変については種々の評価があるが「一種の妥協を試みる三十歳の大人」(奥野)とか「常識的な生活者を仮装」(平野『現代日本文学全集』49解説)という指摘に代表されるように、中期の安定を、時代を考慮しての文字的仮装という視点をたてていることである。これは芸術と実生活の一元論化で、自己の実生活のたてなおしが、即ち芸術の修正と関わってくるもので、その発条がへ日中戦争勃発後の社会での大人の生活(奥野)とみるならば、そこには時局と同調という視点も望みできるのである。が、果して〈常識人の仮想〉がいわゆる昭和十年代の作家たちに等しくいわれるような芸術の屈折によるものであろうか。太宰の「道化の華」などが、たしかに現実の事件の投影であり、芸術と実生活の一元化——私小説の流儀であったとしても、いわゆる中期といわれる作品をも同一視することは危険である。というのは、以後論じるところであるが、太宰は三度にわたる自殺未遂事件を作品化しておりながら、三度目の谷川中心行と過去二つの自殺行とはその過程で明らかに相違を見出せるのである。これは過去二度の事件の芸術化(「道化の華」「狂言の神」と違った手法を谷川事件(「姥捨」)のなかでは狙っていたということになる。もし、前二つの事件を扱った作品に芸術と実生活の一元化——リアルな私小説とみるならば、中期への端緒となった「姥捨」はそれと異った事実拘泥しない

作品となっていたはずである。が、年令的には〈三十代の大人〉になつていたことは事実であっても、内的変化であつて日中戦争とは無縁な創作方法であつたといえる。〈常識人の仮想〉もまだ大人になつた生活の知恵であり時局とは疎遠な態度といえよう。

2

太宰が昭和11年の『晩年』(6月砂子書房)発刊後、退廃的な生活を送つたことについてはよく知られているのでここでは書かないが、過失を犯した妻・初代と別れ(12・6)、天沼一丁目の鎌滝方に下宿してから生活は「全く葬り去られ、廃人の待遇をうけていた」(東京八景)のである。鎌滝での独身生活は、ほとんど何もせず酒に浸りながら将棋とトランプに怠惰な日々を送り、太宰の監視人として兄から委嘱されていたといわれる中畑慶吉、や井伏鱒二の怒りを買う生活を送っていたのである。この昭和12年の6月から、井伏を追つて御坂峠の天下茶屋にいった13年9月までのうち、13年の初めごろまでは二、三の小品がみられるだけで仕事らしい仕事もしていない。ところが後半になって、『満願』(文筆)13・9、「姥捨」(新潮)13・10)を書くが、この両作品には太宰の作風の転変がわずかながら窺うことができるのである。「姥捨」は発表時期からいうと13年の中頃の天沼時代に書かれたものと推定できるが、自身の荒廃した生活の収斂のうえに立つて執筆されたものといえる。さて、太宰が初代と離別した直後に書いた「パンフレット式の小さな本出てわずかですが、印税もらへさうですし、このあひだからかかつてゐた小説も、やつとこ

仕上りまして、これをお金にするつもりでございます。今月は、初代もいよいよ母のもとに帰ってしまひ」(平岡敏男宛12・7・22)という書簡は「姥捨」成立への暗示を含んだものである。即ちここであるパンフレット式の小さな本とは「二十世紀旗手」であり、このあいだからかかっていた小説」というのは、その後の書簡に『新潮』の小説25枚仕あげてもっと力作をといわれて五十枚ぐらいの中篇傑作を太いに苦勞している次第なのです」(中畑慶吉宛12・9・25)というところから推して明らかに『新潮』発表予定であった25枚のものと思われ、ちょうど初代との離別前後に書きあげたものとみられる。少なくとも、初代との心中行、離別とデカダンスな生活を送っていた太宰には、大きな構想に基づくロマンを描くことは不可能であったと思われるところから、このあいだからとりかかっていた作品」とは自己の周辺の事件(谷川心中行)を作品化したものと推定される。ところが『新潮』編集長檜崎勲からはもっと力作をと懇望され、本格的ロマンとして書きなおそうと自己の位相(従来の手法)の転回を意識しはめるのである。これが中畑宛書簡が書かれた12年9月で、鎌漣の怠惰な生活に沈潜しながらも、作家としての意欲をわずかながらも見せはめるのである。これは太宰自身「健康になつていった」(東京八景)と書いていったことと一致している。即ち、この頃の太宰は、芸術(小説)的な欲求と退廃的な実生活との相克で自身行き悩み、已れの方角を見失いがちな煩悶のなかであつて、よけいに酒やいゆる悪友たちによつてこの苦しみを忘却しようとしたのではなからうか。『新潮』編集長・檜崎勲宛

書簡に「このたびの原稿のことは、編集責任者として、致しかたないことにて、このことは私のはうで、いろいろ反省して居ります。あの原稿は、私、永く保存して置くつもりでございます。……『サタンのお愛』を組置のままにして、正月十日までに、二十五枚の全然別箇の短篇完成させ御送り申しますゆゑ、それと変更させて下さい。来年になれば、私も身のまはりを整とんして、清潔に精進して行くつもりであります」(昭12・12・21)というのがある。この書簡は、太宰の〈25枚〉原稿未掲載についての理由を書き送った檜崎の書簡に対する返事である事は明らかだが、このなかにはいくつかの重要な意味あいを含んでいる。即ち、さきの平岡宛書簡の25枚の〈このあいだからとりかかっていた小説〉が『新潮』掲載不可能となり、その題名が「サタンのお愛」であることは想像がつく。いかなる理由で掲載不可能になつたか、檜崎の書簡がわからないので明確ではないが、(いろいろ反省しています)とか〈長く保存しておきます〉という太宰の言葉や、9月25日付の中畑慶吉宛書簡にみえる新潮編集者の言葉「太宰は病氣中評判を落してゐるから、病氣全快後の作品は、うんと力作にしたいだきたい、大いに名譽恢復させてやりたいから、枚数も、四十枚でも五十枚でも何枚でもいいから、もっと力作を」などからみて、太宰の独居中の不評判を上塗りするようなもの、即ちパビナル中毒で入院中のことないしは谷川の心中未遂事件を題材として私小説風に描いたものと推測できる。そのため今までの「狂言の神」や「道化の華」の続篇として誤解されるのを恐れての結果と思われるのである。そして、檜崎の要望から「サタンのお愛」

のかわりに書き送ったのが13年3月号に掲載された「一日の勞苦」であることは、さきの組み置かれた「サタン」の恋」が12月末（檜崎宛書簡）であることを考えれば間違いないところである。しかし、25枚であったものが、10枚にも満たない小品となつているところに当時の太宰の苦境が推察できるのである。というのは、さきの檜崎宛書簡（昭12・12・21）の後半で「実はあの稿料あてにして、このとしの瀬渡り越すつもりでございましたが、——途方にくれました。」と書いている。その後のところでは「25枚の全く別箇の短篇を完成する」と稿料の前借りを申し込んでいたのである。太宰はすでにこの作品の稿料を年末の越年資金として予定していたためどうしてもこの稿料が必要であつた。そのためには同じ稿料が予想される25枚の作品を書く必要があつた。しかし、結局は10枚にも満たないエッセイとなつて越年資金前借の埋め合わせをしたものと推測できるのである。檜崎の好意から50枚ぐらいの作品に取り組んでいる時であり、早急に25枚も執筆することは不可能であつたに違いない。ただ生活上の要求から檜崎に泣訴したものと想像できる。だから、書かれたエッセイは何でもない平凡なものに終っているが、「姥捨」への転換が語られているところに注意すべきである。即ち「心境の変化」（鳥居邦朗「太宰文学の二つの傾向」『太宰治研究』2）という指摘にみられるように今までの自分の芸術に対する弁明へ作者はすべて作中人物であつたから決意へロマンスを書くべきだを述べて、これからの展開の内面が語られている。この頃はさきに指摘したように二、三のエッセイしかないが、実際に作風転換の苦悩と模索を意

情な生活に隠弊して書けなかつたのであろうか。ひとつには、佐藤春夫が「芥川賞」（『改造』昭11・11）で、太宰を非難したことにより文壇の反駁をかい干されて発表の場が狭められたこともあるが、その裏にはいま、述べたように50枚でも60枚でもという『新潮』編集長、檜崎勲の好意に答えるべく、「サタン」の恋」の改稿、つまり「姥捨」の構想と整理にとりかかつていたのである。翌年になつたら整理して」という気持は、昭和13年に入つたら、生活、文学共に新しく立ちなおろうとする決意が内燃していたのである。それから8ヶ月後、太宰は師と仰ぐ井伏鱒二に次のような手紙（13・8・11）を送っている。

私は、毎日、少しづつ小説を書きすすめております。もう二、三日でいま書いている小説書きあがる筈でこれを新潮に送り、それからすぐ、文芸春秋に送るのを書こうと存じて居ります。リアルな私小説は、もうとうぶん書きたくなくなりまして。フィクションの、あかるい題材をのみ選ぶつもりでございます。

こんどのお嫁のお話は、私、そのお話だけでお情どんなにかありがたく、いままで経験したこともなかったあたたかい世間をみせていただいたような気がいたしました……

「一日の勞苦」を発表した13年の3月以降『新潮』に発表した作品がないことから「今書いている小説」は「姥捨」に間違いのないと思う。とすると、へ少しづつ書きつづけていた『新潮』発表予定の小説は、書きなおしをいわれてから11ヶ月間、その前の25枚の草稿（サタン」の愛）から考えると一年以上もの月日にわたつ

て楯崎の好意と期待にこたえるべく推敲をかさね書きつづけていたことになる、その結果、初代との心中行、たぶん「サタンの恋」の改稿、増補作である「姥捨」が生れるのである。それは、「すぐに金になるような作品」——『新潮』編集長が認めるような価値ある作品として生れかわっていくわけである。その価値とはヘリアルな私小説でなくフィクションの明るい小説（井伏鱒二「文学上」の試み）の実践化の試みでなければならず、太宰自身は新しい飛躍の志願をもって、初代との心中未遂事件を客観視できるまでの心の落ちつきとヘリアルな私小説との決別が用意されていたことになるのである。

3

さて、「姥捨」はいうまでもなく、妻、初代との心中未遂事件を題材にしたものであるが、自己の病氣や初代の過失などの精算が書かれていると共に、処女小説集『晩年』につづく第二次の総決算がなされたものとみられる。しかし、「虚構の彷徨」にある「道化の華」や「狂言の神」に表われた作者の意識と眼がそれぞれ「死」に向けられているのに対して、「姥捨」は「生」に向けられていることに大きな違いがある。たしかに、『晩年』の〈葉蔵〉からふつ切れておらず、前期の作風の踏襲で、天下茶屋へ来てから書きあげたと思われる明るい家庭小説（フィクション）とは異って相変らず暗うつな私小説風のものであり、いわゆる中期の萌芽は明確にはみられない。しかし、内容的にみるといくつかの転変の契機が読みとれ生への執着がみられるのである。芸術家にと

っての「生」とはいうまでもなく書くこと——創作への強い衝動・意欲であることは当然である。相馬正一は「これまでの文学生活の総決算であったと同時に職業作家としての出発するための最初の試み」（角川文庫『走れメロス』解説）と評価しているが、『文学上』のみならず『生活上』の清算もこの作品のなかに塗り込められていたといえる。天沼の鎌滝時代の太宰の生活が人の眼を背けさせ、過去の事件から結婚の話までもこわれた（井伏鱒二「亡友」という事実は、太宰をさらに自堕落な生活へと誘っていた一因となっていることは否めない、太宰が天沼の鎌滝方に下宿したのが、12年6月21日で、この二階の四畳半で独身生活が始まったが、6月23日の中畑慶吉宛書簡に「初代の叔父さんと逢ひ万事円滑に話がついた」と書いているところからちょうど正式に離別の話がついた時といえる。そして、ここで緑川貢や塩月糾らと倦怠と情性な生活を始めるのである。「毎日毎日、日中は将棋、夜はトランプで遊び呆けて」（長尾良「倦怠の人・太宰治と」）いたわけで、太宰の懊悩がこの生活のなから窺えるのである。そして、この私拭が「姥捨」の執筆であった。

「姥捨」という作品のなかには大きな二つの転換がみられる。谷川への心中行は、今までの自己の精算ないしは隔絶を計ったものと思われる。谷川へ行く時、太宰は『晩年』の裏表紙に「自家用」と書いた保存用の本をわざわざ「自殺用」と書き換え、しかも丁寧に借金一覧表までつけて持参していること、また、今まで（袖ヶ浦入水事件、鎌倉山縊死未遂事件）の事件は自己の行動上に由来するものであったのに、谷川事件は妻の姦通という第三

者によつてもたらされたことからおきた行為であり、過去の二度の事件よりも自己転換（断絶）の気持がもつと強烈であつたと思われる。この二つの転換の意図は単に自己だけでなく、自己にまつわるすべてのもの、妻初代をも含めた断絶であり、彼自身の芸術観——創作方法も同様であつた。心中行が未遂に終つた時、二人の決別はすでに決つていたといえる。太宰側からいへば、この清算は、むしろ初代と別れるための手段とみる相馬正一の推論は正しかつたのではあるまいか。すべての断絶の核とすべきものは「精神的に許せない」初代であつたとみられ、未遂後の太宰が、「姥捨」の嘉七と違つて実際にはひどく不気嫌で、別々に東京に帰り、太宰はそのまま碧雲荘に初代は井伏家にひきとられた事実は、あきらかにその事情を語つていふと思う。芸術的にいふならば、「リアルな私小説は書きたくなくなりました」（井伏宛書簡前出）という言葉は、今まで書いていたリアルな私小説との決別で「狂言の神」や「道化の華」の自己告白性と絶縁して新しいフィクション中心の作風を樹立しようとしていたとみられるのである。また、前二作品が「大庭葉蔵」ないしは太宰という実名の主人公のなかに自己の内像を塗り込めていたのに対し、「姥捨」では嘉七という今まで使用したことのない主人公をたて、自己を語らそうとしていることも葉蔵との断絶のうえにたつての作品構築であり、葉蔵との断絶とはいふまでもなくそれまでの自己との断絶に違ひないわけである。

もう少し「姥捨」にそつてみると、嘉七が心中を決意するまでの過程が実に冷静で客観的に描かれており、葉蔵のように主観的

に切迫したり軽薄になつたりしたところがなく、事件の進捗に分析的で客観的な態度を持っている。主人公嘉七には作者と膠着した眼でなく、一人の創造上の人間に対する傍観者としての眼をみるのである。太宰がこの作品で描いた自殺行は転生への出発としており、旅立ちの場面での「私ひとりの身の上は、どうなつてもかまわない。反立法としての私の役割が、次に生れる明朗に少しでも役立てば……」とか、催眠剤を飲む時には、「生き残つたやつは、つよく生きるんだぞ」という会話など、中期への生活のたてなおしと明朗な作品への宣言とみることができ。だから、さきにふれた初代との自殺行は初めから決別のためという相馬の推量が重視されてくるのである。初代の姿は単に醜い老婆にすぎなかつたわけである。ここにことさら「姥捨」と題して谷川事件を描いた太宰の冷静な意図が浮き上つてくるのである。「姥捨」とはいふまでもなく初代そのものに対する謂であつた。そこには自意識のつよい暗うつな太宰の姿は消え、もつと明るい、初代との決別を姥捨とまで言い切ることのできる飾らない太宰の姿が萌えはじめていたのである。まさに虚飾をすて単純にならうとする内像の転回であつた。

単純にならう、単純にならう。男らしさというこの言葉の単純性を笑うまい。人間は、素朴に生きるより、他に、生き方がないものだ。

おれは、この女を愛してゐる。どうしていいか、わからないほど愛してゐる。そいつが、おれの苦悩のはじまりなんだ。けれども、もう、いい。おれは、愛しながら遠ざかり得

る何かしら強さを得た。生きて行くためには愛をさへ犠牲にしなければならぬ。

この一文のなかには、太宰はこの心中行を、過去の自分と断絶し、そこから飛躍しようとする発条として初代と別れ新しい生活に、あるいは文学に開眼しようとする強い意志が読みとれるのである。〈愛しながら遠ざかる〉という気持は自己客観化の可能性の拡大で、むしろ冷静な状況分析と生活のたてなおし（初代との決別）が可能になってきているのである。太宰が〈思いも新たに〉して御坂峠の天下茶屋にいる時のことを書いた作品に「富嶽百景」『作品』14・2・3）があるが、このなかで、娼婦たちが峠に遊びにきた様子を主人公が茶屋の二階からみているところがある。

二階のひとりの男の、いのち惜しまぬ共感も、これら遊女の幸福に関しては、なんの加へるところがない。私は、ただ、見てゐなければならぬのだ。苦しむものは苦しみ。落ちるものは落ちよ。私に関係したことではない。それが世の中だ。さう無理につめたく装ひ、かれらを見下ろしてゐるのだが、私は、かなり苦しかった。

二階のひとりの男とはいふまでもなく太宰自身であり、彼のみている娼婦という言葉のなかにはかつて芸者であった初代を意識したものといえる。太宰の内的転換は初代との決別にあり、ともすると主情的な情念に流されやすい己れの性格を修正して〈愛しながら〉とか〈苦しみながら〉自己との距りを置いて客観性をもたせることにある。この姿勢が創作上の場合に〈単一表現〉とい

う言い方をさせ、ヘリアルな私小説風のをやめフィクションの強い作品〉を書こうと決意させるのである。この明確な決意はあくまでも私生活との改変と相通するもので、「富嶽百景」の舞台となった御坂峠行きの決意を生んだ初代との決別——「娼捨」が、ここでもやはりひとつの契機となっていることはすでに「娼捨」の成立過程で論じたところである。

4

さて、この表理上の転換、客観的な「単一表現」への移行を明瞭に示しているのが「HUMAN LOST」の改稿である。この作品は、昭和12年4月の『新潮』に発表されたもので、書かれたのは、武蔵野病院（バビナール中毒入院）退院（11月12日）直後と推定される。山内祥史によれば「退院してから」、「熱海に転地するまでの短い期間」、即ち11月15日から24日までの十日間に書かれたものとみられ、自分の方向も定まらぬ不安な精神状態「一面の焼野原に十日間さまよひ、デスベラに落ち込む危険を感じ」（『崎潤苑』12・11・26）しながら書いたものである。たしかに不評判であつたし、自身、観念的で晦渋な下降的（前期的）作品と感じられたのであろうことはその改稿に表われている。

今、ここで「HUMAN LOST」について述べるのが論旨でないで詳細は避けるが、この作品は『新潮』に発表して以来、長らく単行本に収録されなかったが、15年5月発行の『東京八景』（実業日本社）にはじめて収められている。そして、この初版本に収録する際に、『新潮』発表の作品をかなり削除、圧縮し

ているのである。勿論、昭和15年という検閲の厳しい時代での思惑もあるが、長い間単行本に収載しなかったという事実と思ひあわせると、「HUMAN LOST」執筆後の心境の変化と作風の転換を象徴しているものといえる。「HUMAN LOST」と前後して書かれた作品に、「創生記」（『新潮』11・10）、「燈籠」（『若草』12・10）の二作品があるが、これらも単行本に収録されたのが遅れて（『創生記』は17年11月『信天翁』（昭南書房）に、「燈籠」は17年6月『女性』（博文館刊）であるがいずれも第一創作集『晩年』と以降に書かれたものであり、生活の荒廃した低迷期に書いたものである。文体は共に難渋な観念的なもので、一種の独白体で書かれており、この期の太宰の内的吐露とみられるものである。そして、これらの作品が単行本に収録された時期は、いわゆる「開花と安定」といわれた内的転変後のことであり、収録にあたっては「HUMAN LOST」ほどではないが、相当部分の訂正があり、そのまま収録するにはかなりの抵抗と気恥しさがあつた結果と思われる。

ところで「HUMAN LOST」の修正は最も顕著で、いま、雑誌（新潮）発表から初版本収載のさい削除された主要な箇所を書き出してみると、

・無智の洗濯女よ（雑誌187頁12行～13行）

・尚、ここに名を録するにも価せぬ……きみ、ロヴェスピエルが瞳のみ（雑誌189頁11行～13行）

・愛してゐる、といふ……愛してゐない、と言ひ切り得る（雑誌191頁7行～8行）

・院主（出資者）の訓辞……人のいのちを奪ふトリック（雑誌192頁2行～3行）

などのほか字数だけで約一千字が削除されている。この削られた部分をみると、書き方が晦渋になりすぎて観念的なところ、あるいは自己吐露的で必要な文章が対象となつてゐることである。たとえば

昨日、約束の迎へ来らず、ありがたう。けさ、おもむろに鉛筆執つた。愛してゐる、といふ。けれども小市民四十歳の者は、われらを受する術を知つてゐない、愛し得ぬのだ。金魚へ「ふ」だ。愛してゐない、と言ひ切り得る。（雑誌191頁7行～8行）

私はすすまなければいけないのだ。母の胸ひからびてわれを抱き入れることなし。上へ、上へ、と逃れゆくこそ、われのさだめ。（雑誌191頁1行）

（共に傍線部は削除箇所）

右の二つの例を見ても明らかであるが、傍線部分が一体何を言おうとしているのか理解に苦しむような観念的な文章で、作者の過剰な自意識をもてあました内面の吐露となつてゐる。これらの箇所を意識的に削つて単純化しようとしており、削られた後の文章（単行本収載のもの）の方が解り易く意味鮮明になつてゐる。この点から書きなおしについてみて同様のことがいえる。

トリック（雑誌190頁5行）

↓経営法について

永遠に（雑誌190頁10行）

↓いつまでも

作品のかげの、私の固さ戒律、知るや君。否、その激しさの、高さの、ほどを（雑193頁8行）

いまは認識のいはば再認識、表現の時期である。（雑196頁↓いまは表現の時期である。12行）

右の例ではひらがなを多くし語句を極端にわかりやすくして必要なものを削り、中期太宰のいう〈単一表現〉の狙いを窺うことができる。

さて、以上のような削除改稿のほかに、意識的に改稿したと思われるところに妻、初代に関するところがある。

善四郎ののろま、Y子さん ↓ 兄さん

（雑184頁5行）

妻をのしる文（雑187頁8行）↓弱者をのしる

無智の洗濯女よ妻は、職業ではない。妻は義務ではない。

（雑187頁12行↓13行）

傍線部分削除。

これらの例でわかるように、雑誌発表の頃の心痛は妻を直接攻撃するほどの激情があった。そして、「姥捨」で「おれは愛しながら遠ざかり得る、何かしらの強さを得た」と自身述懐するように谷川中心行後は自分を初代と同体化することなく、初代の存在を遠くで眺める冷静な観察者となることができた。そこに初代に

関わる部分を抹消ないしは改稿して客観視する心の余裕が生れてきたのである。妻をも他者とし虚構化する作家としての自覚が生れてきたわけである。

三番目に指摘できることは時局を意識したと思われる部分である。

ナポレオンもまた風邪をひき、乃木將軍もまた、聞を好み、クレオパトラもまた脱糞せりとの事実。（雑195頁1行）

この一文などは太宰のいう単純化からいえば全文を削除すべきであると思われるが、乃木將軍だけを削ったのは明らかに時局を意識しての結果であると思う。

さて、次に指摘できることは、攻撃的な文章の削除である。

私は、「おめん」のかげごゑのみ盛大の、里見、島崎などの姓名によりて代表せられる老作家たちの剣術先生的硬直を避けた。キリストの卑屈を得たく修業した。（雑193頁9行↓10行）

あなた知ってゐる？、教授とは、どれほど勉強、研究してゐるものか。学者のガウンをはげ。大本教主の頭髮剃り落した姿よりも、さらに一層、みるみる矮小化せむこと必せり（全文削除）（雑194頁10行↓12行）

……壁のすきま、鉄格子の窓、四方八方よりひそひそ忍びいる様、春の風の如く、むしろ快し。院主（出資者）の訓辞、かの説教強盗のそれより、少し声やさしく、温顔なるのみ。内容、もとより、底知れぬトリックの沼。しかも直接に、人のいのちを奪ふトリック。（雑192頁2行↓3行）

(傍線部分は削除箇所)

右のほか、いずれも攻撃的なもの、怨情的なものなど、「芥川賞」などにみられる太宰の異常とまで思われる偏執的な性格を象徴するような文章は削られ心の和らぎと社会的融和性を覗くことができるのである。ここには明らかに自意識過剰な文学青年像は失われ、平凡な市井人を想像できるのである。「太宰も、このころは、多少、屹つとなつて居ります。少しづつ重量感できました。むかしのニヤケタ、ウソツキの太宰もなつかしいが、あれでは、生きてゆけません。」(山岸外史宛書簡13・10・17)と静かに自己回想ができるような姿勢——〈三十歳の大人の適応〉(奥野)とかへ常識的生活者の仮装〉(平野)への時代へ足を踏み入れるのである。これは、妻初代に関わる場合も同様であるが、自分を客観視することができるよう心の余裕、即ち、文学的という単一表現への志向と、その準備のための心の整理ができたことを暗示している。それが「富嶽百景」での娼婦を見た時、苦しみながらも自分に関係がないと客観視できる自己昇華が可能になってくるのである。そこに客観的作品、フィクションの強い方法——単一表現が生れてくるわけだが、その裏には初代をも客観的にみるることができる高踏(芸術)性を生んだ谷川中心行がこの自己転換の契機になっていたのである。結果としては「HUMAN LOST」の大巾改稿であり、この作品が書かれた11年の荒唐時と、単行本収載時の17年の落着いた気持との内的状況の転変に象徴されてくるわけである。この転換が、今までの自分に密着したヘリアルな私小説」にすぎなかった12年頃までの作風から脱皮させ、新たな文学的創造世界

のなかに己れの世界を見出そうとする現実に生きる社会人としての、また芸術家としての自覚を生み出すのである。その宣言とも言うべき作品に「姥捨」のあとに書かれた「I can speak」(『若草』14・2)がある。「姥捨」での自己転換の試みが一応の話題をまいた自覚が虚構性の強い小説を書くことにより新たな躍進を目指すところとなったのである。

わが歌、声を失ひ、しばらく東京で無為徒食して、そのうちに、何か歌でなく謂はば「生活のつぶやき」とでもいったやうなものを、ぼそぼそ書きはじめて、自分の文学のすすむべき路すこしづつ、そのおのれの作品に依つて知らされ、ま、こんなところかなと多少、自信に似たものを得て、まへから腹案してゐた長い小説に取りかかった。

この長い小説というまでもなく「火の鳥」で、太宰が無為徒食から抜け出して自信に似たものをもって取りかかった作品なのである。太宰が思いを新たにすつもりで向つた御坂峠行きでとりかかったのがこの作品であり、「とにかくこれを完成させぬうちは東京へ帰るまい」(「Caribbean」と決意させるほどの意欲をもつてとりかかったのである。また、井伏鱒二にも「たしか、いいもののでございますから、本にでもなつたときには、どうか御一読下さい」(昭13・12・16書簡)と書き送るなど強い自信と再生の宣誓とを内包しながら書きすすめていったのである。それまでに書いた「姥捨」、「満願」という転生の伏線へ生活のつぶやきを経て、今までの芸術上、生活上の総決算をしたうえで本格的にとりかかったのが「火の鳥」であった。

「火の鳥」は昭和14年5月20日発行の『愛と美について』（竹村書房）のなかに収載され、これが初出である。この作品集には表題の上に「書き下し短篇集」と記されているように太宰には珍らしい全部未発表の短篇である。このなかには秋風記／新樹の言葉／花燭／愛と美について／火の鳥と五つの作品が集録されているが、最初の「秋風記」と最後に置かれている「火の鳥」をのぞけばいずれも人間生活のはのぼのとした明るさ、未来を感じさせる作品であり、あきらかに太宰のいう「明るいフィクション」の小説が意図されていたといえる。「秋風記」は「日華事変勃発後八九日」と書かれており、これが事実であるとすれば、12年の10月ごろ書かれたものでしょうと「姥捨」の改稿に呻吟している時に書かれていたことになる。とすれば過去との精算に懊悩しどうにかして生きてゆこうとする意欲がや々と持ちえた時で、まだ「明るいフィクション」に到達していなかったと思われる。一方、「火の鳥」は13年12月中旬に一〇〇枚を突破した（昭13・12・16井伏宛）といいながらなぜか未完のままになっている。また、未完のためかこの頃の特徴である明るい結びもない。太宰が御坂峠へ来た目的の一つが「火の鳥」の完成であり、そのことを考えると「むずかしいのである」（読者に「愛と美について」という理由だけで中断すべきものであろうか。天下茶屋での生活を描いた「富嶽百景」ではこの作品の執筆にかなり苦しんでおり、「姥捨」以降の〈単純化〉の表現だけでなくもっと新しい方法を模索していたように思われるのである。それが冒頭での女性への仮託となってくるのである。この方法は太宰の客観描写の一つとみら

れこの前後に書かれた作品によく試みられているのである。この作品の序編へ女優高野幸代に至る以前を記す」という前段では、須々木乙彦という料をこらしたテロリストが、カフエーの女給・高野幸代と帝国ホテルで薬品心中をする。その結果、男は死に女は生き残るといのが物語の発端となっている。乙彦の料ごみのアナキストは過去の太宰に似通ったところがあり、その乙彦が死ぬということは、この物語そのものが自分自身をも抹消し、単なる過去の、それにまつわる恥部との断絶でなく、自分を含めたすべてのものを消し去りたい強い欲求にもとづいている。また男が死に、女が生き残るという設定は、鎌倉、袖ヶ浦事件の事実とは反対で、その作品化である「道化の華」と全く逆の人物配置となっている。ここには袖ヶ浦事件をヘリアルな私小説」とした「道化の華」の前期的試みから断絶して、全く対極的な位相をもつ客観的なフィクション小説「火の鳥」に転換させようとした新しい試みがなされているのである。「姥捨」以後、御坂峠までに至る過去（初代のことなど）との断絶の試みは、明るいフィクションの濃い小説を生み、さらに完全な客観小説——完全なる自己の抹消——のうえにたつて「火の鳥」を書くのである。そして、この抹消された自己は、即ち一度死んだ作者の仮想・乙彦は、生き残った女、高野幸代となって再生するのである。ここに不死鳥・火の鳥の題名が明らかになるのである。再生した高野幸代は過去の名誉回復を「無智なロマンチズム」として死んでいった乙彦にかわって女優となりその名誉を回復しようとするのである。「恥多き生活」を送った太宰治はここに至って作家としての

強い自覚と向上心をもって「火の鳥」を書き、己れの再生を試みに違いないのである。

51・8・30（未完）

注1 奥野健男『太宰治』（昭48・3・10文芸春秋社）及びその

原型となった同氏の二連（近代生活社版・春秋社版）の太宰論、平野謙『太宰治論』（筑摩『現代日本文学全集』解説49・29・9）、亀井勝一郎解説（創元社版『太宰治作品集』）ほか

2 島居邦朗氏は「道化の華」は「太宰自身の生活に取材した小説であると言ってよからう。大庭葉蔵は、生活者太宰の虚構化された主人公」（虚構の彷徨『国文学』49・2）とみ、長谷川泉編『太宰文学作中人物事典』（『解釈と鑑賞』44・5）では「大庭葉蔵はこの『僕』なる作中の作者自身を仮託したもの」といい、同時代評でも豊田三郎は「彼の作品のほとんど全部に太宰治といふ、作者自身が登場する」（『日本読書新聞』12・7・12）とまた、亀井勝一郎は「大庭葉蔵は作者、太宰の黒点」（『人間失格』の大庭葉蔵『群像』26・12）とも述べている。

3、4 中畑氏とは津島家の遠縁にあたる呉服商で、同様の立場に洋服屋の北芳四郎がいるが、井伏氏と共に鎌滝の下宿に月一回ぐらいいは訪ねてきたところから同氏と親しい中畑氏をみるべきであろう。（長尾良『太宰治その人と』林書庄40・10）

5 書簡及び発表作品から推定

8 太宰は11月25日から熱海温泉に一ヶ月ほど滞在そこで「二十世紀旗手」（『改造』12・1）を書いているが、山内祥史の書誌研究（『二十世紀旗手』の書誌『日本文学』51・6）によれば、9月20日ごろ60枚ちかく書いたものを改稿したものであるという。

7 『愛と美について』（竹村書房14・5）収載の「新樹の言葉」や「花燭」「愛と美について」などによく表われている。

8 前者は共産党運動からの離脱で、後者は『みやこ新聞』入社試験の失敗からといわれている。

9 相馬正一『太宰治と井伏鱒二』（津軽書房47・2）

10 井伏鱒二「十年前頃―太宰治に関する雑用事」（『群像』23・11）

11 山内祥史『二十世紀旗手』の書誌（『日本文学』51・6）たとえば「誌界展望」（『三田文学』12・5）で「太宰治のものは、もう沢山だといふ感じ」と述べている。

13 『娼捨』については、『三田文学』『文学界』『新潮』など、当時の代表的文芸雑誌が13年の11月の創作時評などで一斉にとりあげている。

14 「燈籠」（『若草』12・10）、「女生徒」（『文学界』14・4）、「葉桜と魔笛」（『若草』14・4）などで女性に仮託して一人称で書いている。